



写真1 野中古墳第1列の甲冑等出土状況
(掲載許可：大阪大学考古学研究室)



其の二十五

古墳時代〈13〉
葛城氏の盛衰
室宮山古墳と
陪塚ネコ塚古墳
(2)

生涯学習課 文化財係
☎内線696

室宮山古墳の被葬者像を考えるにあたり、まずはじめに取り上げたいのは陪塚ネコ塚古墳です。陪塚とは天皇陵古墳クラスの大形前方後円墳(主墳)に付属する中小規模の古墳

そのことを指し、主墳との位置関係では濠を隔て、周堤に接する位置に築造されるものを言います。陪塚は5世紀代においてのみ認められ、仁徳陵古墳(堺市)や応神陵古墳(羽曳野市)が築かれる百舌鳥・古市古墳群において出現し、次第に主墳1基あたりの数も増していきます。奈良県内では佐紀盾列古墳群でも見られるのですが、これらの大形古墳群の事例を除けば、陪塚を伴う古墳はごく少数に過ぎません。

それでは、陪塚は何のために造られたのでしょうか。古市古墳群の中に墓山古墳という大形前方後円墳があり、それに伴う野中古墳という方墳は陪塚の典型例として有名です。野中古墳には5つの木箱が埋められ(図1)、それぞれの内部からは大量の各種遺物が出土しました。西から第1列、第2列・・・と称された木箱のうち人体が埋葬されたのは第2列で、被葬者自身が使用するための甲冑も第2列に副葬されています。

一方で第1列からは10組もの甲冑が出土(写真1)しているのですが、ではそれらの本来の持ち主は誰であったのか、が問題となります。5世紀代の甲冑(写真2)は、冑と甲(短甲)のほか首から胸背部を防禦する頸甲などの付属具で構成されますが、10組の甲冑それぞれの組み合わせを詳細に検討したところ、これらは個

人個人の持ち物が集められて10組となったのではなく、元々、武器庫などで保管されていた多くの甲冑のうち10組が選ばれて、この野中古墳第1列に埋め納められたことが判明しました。つまり、野中古墳の被葬者は武器庫の管理者であったといえるわけで、このことは大王の周辺では、王権の生命線ともいえる武器でさえも大王自らが管理するわけではなく、小規模な陪塚の被葬者である配下に管理を委ねるという、高度な体制が確立していたことを示します。

実は室宮山古墳の陪塚、ネコ塚古墳でもかつて少くない量の甲冑片などが採集されたことがあります。他方、室宮山古墳の中心主体である後円部南石室には甲冑は1〜2組しか副葬されていなかったことも判つ



写真2 宇治二子塚古墳北墳出土の甲冑
(掲載許可：宇治市歴史資料館)

ています。このことは陪塚、ネコ塚古墳の被葬者は武器庫の管理者として仕えたことを示すものであり、室宮山古墳被葬者の周辺では大王の周辺で見られるものに比肩する高度な政治体制が敷かれていたことが判明します。

参考文献

拙著『古墳時代の王権と軍事』、2006年、学生社

(文責 藤田和尊)



図1 野中古墳遺物出土状況
(『河内野中古墳の研究』、1976年、大阪大学 から)



2010. 9